

批評の機能について

—その三つの立場—

平野 温美*

(昭和55年5月1日受理)

On the Function of Criticism

—Its Three Viewpoints—

by Harumi HIRANO

“The critical power is of lower rank than the creative,” wrote Matthew Arnold in 1864 in his essay “The Function of Criticism at the Present Time.” He said in it that the function of literary criticism lies in the making of “an intellectual situation of which the creative power can profitably avail itself.” Ever since a great number of essays under the same or similar title have been written both by artists and critics. As literature came to be taught in colleges or universities in this century, literary criticism began to call for its own theory so as to be taught and conveyed to the students as a conceptual knowledge and as a structure of thought.

In this paper I introduce some of the essays on the function of literary criticism written since the time of Matthew Arnold up to the present day and try to explicate three different viewpoints among them. Those who belong to the first group share the view that literary criticism is a secondary or subordinate activity to the creative which, to use the word by T. S. Eliot, is an “autotelic” activity.

J. E. Spingarn, on the other hand, reminded us of the “creative function” of criticism and insisted on the necessity of the “new criticism” in 1910. Those in the second group reject the view that literary criticism is a kind of parasite on literature and try to establish its own theory and principles which are of practical use in the application.

The third group is not the corresponding or counterpart view of the first and the second. Rather its standpoint can be said to be an another way of approach to literary criticism. The conspicuous method is the use of already established learnings such as psychology, philosophy, or history in the exercise of literary exposition and judgement.

But after all, a part of what Matthew Arnold said, his expectation, still holds true. He insisted that criticism must be “bound to a joint action and working to a common result.” The view is transmitted through T. S. Eliot to F. R. Leavis. Although the second group may seem to hasten in the pursuit of the logical and

* 北見工業大学一般教育等

conceptual knowledge of criticism, it is a necessary step toward the systematic knowledge about literature which will be the common result.

(一)

「ウェレック博士は哲学者であり……私は文学批評家であるという自負を持っている」と F. R. リーヴィスは、彼の論文「文学批評と哲学」の中で繰り返し述べている。ルネ・ウェレックを一般的な意味で哲学者と呼ぶ者はいないが、F. R. リーヴィスのこの表現は、文学批評の機能に対する考え方の相違を巧みに示しているように思われる。文学批評の機能は一体何であるかを問うことは、文学批評の立場は何だろうと問うことと同じであり、その問いは批評と創作(作品)との関係を問うことにも結びつく。創作活動はその形式、内容ともに自ずからの発展衰退を営んできたし、またその存在理由は、極言すれば読者が存在するというだけで成り立つものである。それに対して批評は、読者と作品の間に立ち、その存在理由を問われ、また自問も繰り返してきた。批評家とは「完全なる読者」(F. R. リーヴィス)であるとする、作品—批評家—読者は、作品—読者の関係に収束されるだろう。しかしながら、学者とか批評家と呼ばれる人々が、学生および一般読者を相手に、専門家として大学で講じ、著作をするのであれば、ここでもうひとつ、学問として成立している諸科学との関係も絡んで、尚一層批評の存在のあり方が問われることにもなる。文学が人間のすべての経験を対象としているのであれば、同じくやはり人間経験を研究対象とする、例えば歴史、哲学、心理学、あるいは文化人類学などと、いかなる付き合いをするのか、家族関係を結ぶのか、独立するのかという問いも生じてくる。「文学批評家の直面する問題は生活様式 (mode of living) を見出すことだ」と、Y. ウィンターズはいみじくも述べている。

マシュー・アーノルドが「今日の批評の機能」を書いたのは1864年で、その後数多くの批評論が書かれてきた。ここでは、それらのいくつかを取り上げて、上記の問題点との関連で、批評の三つの立場を紹介してみたい。第一は、批評が文学作品に対して二次的な立場であることの主張。第二は、批評を独立した学問とする試み。第三は、その他の人文科学研究を土台として、文学作品を研究する立場である。

(二)

批評と一口に言っても、この言葉の示すものは、具体的な文学作品を前にして、その解釈及び評価を行う作業を意味することもあれば、批評精神といった意味あいもある。この批評精神とは、批評家のみに属するものではなく、創作家が作品を産み出す中にも当然ながら必要なものである。すなわち、作家が経験や社会を素材にして、そこから作品という“form”をつくり上げる時の取捨選択、統合作業と、批評家がそれら作品を素材として、いわば批評という“form”をつくり出す働きを営む時に、その精神は一致する。

ここに述べようとする二次的存在としての批評とは、上記の批評精神という意味ではなく、T. S. エリオットの言葉を借りると、芸術作品が「自己目的」(autotelic)であるのに、一方批評は常に自己以外のものについての表現であるという意味である。またその表現は、主観を取り除いた、事実に基づく解釈を行うものであるという意味である。批評家は理想的読者であり、創作が構築するいわば文学の王国に対しては、補助的、間接的な影響力しか持たず、たとえ批評が実践的行為や、文学そのものに直接の影響力を振りたいと願っても、その思いは表面には出てこないで、慎しみ深く慎重な態度をした、言うなれば創作の従者として行動するのである。

T. S. エリオットが「批評の機能」で述べていることを断片的に拾ってみると、批評とは「言葉によって芸術作品について述べ、それを説明するもの」であり、よって批評家は「高度に発達した事実感覚を持っていなければならない。」批評家の「解釈が正しいというのは、解釈そのものではなく、読者が見落したであろう事実を読者に与えることである。」「勿論、事実の召使いではなく主人にならなければいけないが、その事実を使いこなす天才が現われるまでは最終判断は待たなければならない。」ひっきょう T. S. エリオットが言わんとするのは、彼が「伝統と個人の才能」の中で述べているところの「現存する作品がつくる理想的秩序」をとり囲む姿で批評は存在し、その秩序に対して批評のすべき役割はあまりにも少なく、変更を迫ることなどは仮定すら出来ないということである。

彼の考えはマシュー・アーノルドの論文の内容をいくつか受け継いでいる。アーノルドは、「批評能力は創作能力に劣る。」とまず述べ、しかしながら批評は「文学作品が産み出されるための必要条件」を満たすものであると言う。すなわち、「創作活動の才能は、ある知的、精神的雰囲気、言い換えると観念の秩序の中で鼓舞される」のであるから、批評とはその「知性の条件としての場をつくる仕事である。」批評の態度は、だから常に「冷静」なものであると言う。

1891年にオスカー・ワイルドは「芸術家としての批評家」と題する論文の中で、「真の批評家こそ創造的である」と述べた。一見アーノルドの逆を言うようであるが、彼の「虚言の衰退」で言うところの「人生が芸術を模倣する」と同様に、人間の営みの一面を独自のレトリックで表現したのであって、アーノルドの主張する、「時代の知性の雰囲気づくりをする」を受け継いでいると言えよう。

同じく1891年に発表されたヘンリー・ジェームスの「批評」は、世に秀れた批評の無いのを嘆きつつも、「経験と感受性が効果的に結びついた、深みを経た批評」こそは「芸術家の真の援助者であり、従者であり、解説者であり兄弟である」と言う。批評家の人生経験は二重のものであって、「彼自身の直接の人生体験と(作家達のそれである)間接の人生経験」とが結び合っているのだと言う。

ヘンリー・ジェームスと T. S. エリオットの相方を受け継いでいるのが F. R. リーヴィス

である。リーヴィスは T. S. エリオットの論文に出てくる批評家のなすべきことである、「真の評価を求めるといふ共通の探求」(the common pursuit of true judgment) という表現を受けて、「共通の探求」(The Common Pursuit) と題する論文集を編み、その中に「ヘンリー・ジェームスと批評の機能」という文章を載せた。リーヴィスの主張する批評家とは、「(作品から受ける) 反応, コメント, および意味決定において, 作品そのものから逸脱しない精神を身につけ, それに従う者」である。「逸脱しない」(relevance) という言葉は彼のエッセイに頻繁に出てくる用語であるが, これは抽象化を戒しめることを意味するようである。作家の意図を知るために, 作品の外側の知識を用いる危険, シンボリズムの危険をも含めている。この主旨は彼の「文学批評と哲学」と題する論文の中でより明確に示されていて, 批評家は, 作品を決められた視点や原理で判断することをしりぞけ, まず「作品を出来るだけ敏感に, 完全に体験(realize) する」ことが肝要である。「批評家が経験の面で成長するに従い, より安定した有機的価値判断に至るようになる」と彼は言う。この内容は, 次に述べる第二の範疇に入る J. E. スピンガーン及び後の新批評派が主張するところと重なるものがある。「各々の作品はそれ自体の法則に支配される」というのが新批評派の理論である。両者の異なるのは, 評価の問題で, 片やその法則から原理を導き, そこから評価することを推し進めるのに対し, リーヴィスはそれを個人の経験と感受性の問題に帰そうとする。リーヴィスは最終決定や判断を避けようとした。この態度は文学そのものから他の分野へ踏み出すことなく, 批評の実践を行なおうとする慎重な態度であるが, 同時に作家に対しての批評家の立場を曖昧にし, いわば文学の食客ではないのかと, 次に述べる人々の声が聞えてきそうである。

(三)

次に挙げるのは, 批評を独立した知識体系としようとする試みである。アーノルドの時代はテヌスやスタール夫人等で代表されるような歴史主義の強い時代であったことを考慮に入れると, アーノルドは観念的ではあるが, より積極的な批評の役割を提唱したことになる。しかし批評を創作と同様に創造的であるとすることや, 歴史その他の学問から独立宣言をするまでにはほど遠い。後の「新批評派」の理論的先駆者となった J. E. スピンガーンが, 彼の講演「新批評」を行ったのは 1910 年のことである。スピンガーンは「文学は表現の芸術なり」と定義したクローチェの影響を受けて, 批評とは「表現の研究」であることを確認した上で, 批評家の第一の義務は「詩人(作家)の目的は実際何であったか。彼の果さねばならなかった眼前の課題はいかなるものであったか。また彼はどの程度それを果したか」を問うことであると言う。作品はそれ自体の法則に支配されるものであり, 批評家はその法則にのっとって評価することが大切であるのだから, 今までの古い諸々の規則, 例えば文学を各々のジャンルに仕分けすること, 古い抽象語を用いること等々, およそ 10 項目ほどの規則をスピンガーンはここに取り上げて, それらと惜しみなく手を切らねばならないと強く述べる。

後に新批評派が実践面で活躍したが、その中のひとりアレン・テイトは、30年後の1940年に発表した「今日の批評の機能」の中で、再度批評の独立を求めている。いわく、「実証哲学の分野こそが、今日の精神的無秩序を産み出し……批評の歴史主義的方法が、研究する対象の意味を根底から切り崩してきた」と。

そこから出発したY. ウィンターズは、極めて具体的な提案を同題の論文で展開する。まず批評方法を得るには①種々の問題内容の可能性と、②種々の文学形式の可能性を理解する必要がある。文学形式を研究することとは、可能性のハイラキーを設定し、文学の最終意義を明確にすることによって、各々の形式が全体の中でどの位置関係にあるかを知ることにある。批評の機能は評価することであり、彼ウィンターズは、短詩の可能性を重要視する、と言う。ウィンターズはこの論文中では、②文学形式について論を進めるが、①問題内容については考察を行っていない。

F. R. リーヴィスから哲学者であると言われたルネ・ウェレックは、文学批評とは知的認識を目的とし、最終的には文学についての体系的知識および文学理論を目指さねばならぬと、彼の「文学理論、批評、歴史」の中で述べている。ウェレックもまた新批評派の路線上にいながらも、反歴史主義に徹した新批評派の理論に修正を行っている。文学理論、批評、歴史はそれぞれ別個ではあるが、互に関連しあっていること。歴史主義に規定されず、しかも文学史の助けを借り、また同時に個々の文学批評に及ぶような文学理論の必要性を主張する。

批評は科学の一分野であって、「物質が自然に対する関係は、批評が文学作品に対するのと同じである」との立場から、物理法則を見出すように文学の「原型」を求めるのはノースロップ・フライである。フライの主張は、科学とは別の言葉の世界を求める新批評派と対立するようにも見えるが、やはり文学研究を教育可能なもの、原理的認識が可能な知識体系にしようとする試みであることにおいて一致する。

しかしながら、認識可能な知識体系というのは、混沌とした対象物から、抽象作用という知性で、原理ないし原型を探り出すことであって、リーヴィスの言うように抽象作用そのものが持つ欠点から免れることが難しい場合がある。具体的な例であるが、R. W. B. ルイスが彼の著書「アメリカのアダム」で展開するのは、「人間の無垢、墮落、自然回帰」のパターンを文学作品の中から明快に取り出してみせることであった。扱っている作品の中に、ウィリアム・フォークナーの「熊」がある。この作品を「フォークナーの作品中最高のもの」とルイスが評価するのは、「熊」がそのパターンに全くよく当て嵌るからにすぎない。抽象作用は、その作用を行う側の価値判断を示すことにはなっても、その対象となっている作品を全面的に示すことにはならないことがある。

(四)

第三の範疇に属するのは、心理学、哲学、歴史学など人文研究の分野で既に認められた価

値体系を、批評の基準とするものである。これは文学を文学的に解釈し、いわば文学作品を文学独自の世界の中で評価を探り当てるのではなく、例えば、心理学的に作品を解釈したり、哲学の考察の一部として作品を検討するといったように、作品評価および解釈のもうひとつの場合または側面と言える。しかし文学が人間事象のあらゆる場面を含むものであるならば、これらの批評は明快さをもって、人々に影響を与えることになる。「文学批評への心理学的アプローチ」を著したメイラーとレニガーは、「本能、靈感、天才、創造的想像などのような神秘主義的で説明不可能な言葉に、科学的意味を与え、心理学を文学に適用する」ことを目的とすると述べる。また、今日の批評活動が「かようにも科学の歩みから踏みはずれていることこそ奇妙なことだ」とも言う。

哲学の分野の活躍もめざましく、実存哲学が文学に及ぼした力は否定出来ないだろう。J. P. サルトルが「フランソワ・モーリャック氏と自由」の中で、神について論ずる場合、それは文学形式の問題にも言及することとなる。「小説手法は常に小説家のいづく形而上学に関連する」ことを明せきに示してくれる。

この第三番目の批評の方法は、二番目の文学の領域内で文学理論、原理及び評価の基準を探り出す方向と接触する面はあるだろうが、作品の最終評価への方向では、直接に結びつかないであろう。しかしながら、ある認識方法の例として、思索に刺激を与えることは、誰も否定出来ないことである。

(五)

マッシュュー・アーノルドは、「ヨーロッパをひとつの存在とみなし、知的及び精神的目的のために共同の行為に一体となって、共通の成果に向かって進む批評活動」こそが、未来に役立つ今日の批評であるべきだと述べた。彼の言う共通の成果とは、極めて漠然としたものであるが、これを文学批評における評価および判断という仕事とすれば、同義の内容を T. S. エリオットも繰り返して主張した。そのエリオットの使った「共通の探求」という表現を、F. R. リーヴィスがそのまま彼の著書の題名に用いたことは既に述べた通りである。彼らが最終的な判断や評価に慎重であったことも既に述べたが、その視点から見ると、第二の範疇の批評家たちが性急に結論を求めすぎていると映るかも知れない。けれども、批評の存在に自信を持ち、文学の教育の可能性を求めようとするならば、当然に共通の規準と原理があることを仮定した活動である。実証主義からの独立を主張するあまり、「文学はロジカルではなく、タフなのだ」とアレン・テイトは言ったが、批評はひとつのロジックが展開され、そして破綻してしまっても、やはりロジカルで認識可能なものを追求することになるだろう。また一歩進めて、文学についての体系的知識を得ることが、当然ながら目標となる。そのためには、対象を素通りしてしまうロジックの行きすぎや、ロジックのためのロジックに対する戒しめと、その反対の極にある神秘主義への反動化の危険を、常に心がけなければならないことは言うまでもない。そのような

営みまでもアーノルドの言う共同の行為の中にも含めるのは、拡大解釈ということになるだろうが、少なくとも彼の提案がひとつの起源になっているのは確かである。

引用文献

F. R. Leavis; "Literary Criticism and Philosophy," "Henry James and the Function of Criticism" in *The common Pursuit* (1962), Chatto & Windus, London.

Yvor Winters; *The Function of Criticism: Problem and Exercises* (1962; rep. London: Routledge & Kegan Paul, 1967).

Matthew Arnold; "The Function of Criticism at the Present Time," in *Essays in Criticism* (1923), Kenkyusha, Tokyo.

T. S. Eliot; "Tradition and the Individual Talent," "The Function of Criticism," in *Selected Essays* 3rd ed. (1932; rep. London: Faber and Faber, 1969).

Oscar Wilde; "The Critic as Artist I," "The Critic as Artist II," "The Decay of Lying," in *Oscar Wilde: Selected Writings* (1961), Oxford University Press, London.

Henry James; "Criticism," in *The Portable Henry James* (1951), The Viking Press, New York.

J. E. Spingarn; *The New Criticism* (1967) Kenkyusha, Tokyo.

René Wellek; "Literary Theory, Criticism, and History," in *20th Century Literary Criticism* (1972), Longman, London.

Northrop Frye; "The Archetypes of Literature" in *20th Century Literary Criticism* (1972), Longman, London.

R. W. B. Lewis; *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century* (1955), The University of Chicago Press.

Norman R. E. Maier and H. Willard Reninger; "The Present Function of Criticism," in *A Psychological Approach to Literary Criticism*.

Allen Tate; "The Present Function of Criticism," in *Collected Essays*, Alan Swallow.

ジャンーポール・サルトル; 「フランソワ・モーリャック氏と自由 (小林正訳)」「フォークナーにおける時間性 (渡辺明正訳)」, シチュアシオン I, サルトル全集第十一巻, 人文書院 (昭和40年).

Y.O. 応用基礎のフューチャー社	中野 英 道 源 久 真 也 松 本 伍 員	電子通信学会論文誌 JIS-C, No. 2, p. 27 (1980)	54. 2
工業化学科			
Electrochemical Oxidation of Enamines in the Presence of Organic Anions	Toshio CHBA Mitsuhiko OKIMOTO Hiroshi NAGAI Yoshiyuki TAKATA	Journal of Organic Chemistry, Vol. 44, No. 20	54. 10
Kinetics of Carbon Monoxide Oxidation over Chromium Sesquioxide with two Reaction Paths	Masayoshi KOBAYASHI	Journal of Chemical Technology and En- gineering, Vol. 29	54. 18
Study of Ion Hydration in Acetone 2	Koichi MIURA Hiroyuki FURUI	Inorganic Chemistry, Vol. 18, No. 4	55. 4